

## 第二 1907年「癩予防ニ関スル件」—強制隔離収容政策の開始と責任—

## 第1 近世の「癩」病観とその形成過程

## 一 はじめに

「癩」は中世社会では、主として仏罰による病と考えられていたが、やがて近世に至って“家筋”とみなされるようになり、さらに近代以降は伝染病という認識も加わっていったことが、従来の歴史研究の中で指摘されている。ここでは近代のハンセン病に対する差別意識の歴史的前提として、近世社会の「癩」に対する差別について、次の三つの側面から検討を加える。すなわち、まず第一に「癩」を家筋と見なす考え方が近世のいつ頃から、いかなる背景の中で成立し、普及していくのかという問題、二点目に江戸時代から見られる「天刑病」「業病」という言葉と、家筋意識との関わりについて、そして三点目に現実の「癩」患者がどのような生活を送っていたのか、という問題である。

以下では(1)医学書、(2)各地域史料、(3)文学史料、の順に分析を加える。近世の「癩」患者のおかれた社会的状況を明らかにする作業は、医学書や文学作品よりも、いわゆる一次史料を中心に検討を加えるのが理想的ではあるが、近世の「癩」について記した史料が量的に限られるという制約と、人々の意識の問題を考えるという本テーマの性質から、このような分析形態をとった。

## 二 医学書の分析

調査対象とした江戸時代の医学書は医者向けの専門書を中心に、素人向けの家庭医学書や、寺院関係に伝わる秘伝書類なども含む。その内、「癩」について記載のある約80冊を本節末の別表【調査対象医学書一覧】に掲げた。ここに掲げる医学書の病因論は、①血縁者間に伝わる病とみなす考え方を中心に、②食毒説や③風土説もある。各説はいずれも起源を中国医書に求めることができるのだが、中国医学が展開する様々な病因論の中からこれらを選び取ったところに、日本近世医学の特性が表れていると言えよう。以下、これらの説が成立してきた背景や「癩」に対する差別意識との関係を分析する。

## 1. 「血脈」説の成立

「家筋」という言い方は、医学書には殆ど登場せず、「血脈」や「血脈伝染」などの表現が使われる。「家筋」と表現すれば血縁関係のない配偶者や、配偶者の親族まで含み込むので、「血脈」という表現の方が正確だろう。近世医学はこの「癩」の「血脈」に生まれた人が、血縁者から「伝染」して「癩」になると考えた。

古代から中国医学では、「癩」は悪風や虫によって体が侵されて発病すると考えた。それが人から人へ「伝染」することもあると考えるようになるのは『三因極一病証方論』（陳言、1174年）の頃